

スイミー

広い 海の どこかに、小さな 魚の きょうだいたちが、たのしく くらしていた。

みんな 赤いのに、一ぴきだけは、からす貝よりも まっくら。

およぐのは、だれよりも はやかかった。

名前は スイミー。

ある 日、おそろしい まぐろが、おなかを すかせて、すごい はやきで ミサイルみたいに つつこんで きた。

一口で、まぐろは、小さな 赤い 魚たちを、一ぴき のこらず のみこんだ。

にげたのは スイミーだけ。

スイミーは およいだ、くらい 海の そこを。

こわかった。さびしかった。とても かなしかった。

けれど、海には、すばらしい ものが いっぱい あった。

おもしろい ものを 見る たびに、スイミーは、だんだん 元気を とりもどした。

(ちゅうりやく)

その とき、岩かげに スイミーは 見つけた、スイミーのと そっくりの、小さな 魚の きょうだいたちを。

スイミーは 言った。

「出て こいよ。みんなで あそぼう。おもしろい ものが いっぱいだよ。」

小さな 赤い 魚たちは、こたえた。

「だめだよ。大きな 魚に たべられて しまうよ。」

「だけど、いつまでも そこに じっと して いる わけには いかないよ。なんとか

かんがえなくちゃ。」

スイミーは かんがえた。いろいろ かんがえた。うんと かんがえた。

それから、とつぜん、スイミーは さげんだ。

「そうだ。みんな いっしょに およぐんだ。海で いちばん 大きな 魚の ふりを して。」

スイミーは 教えた。けっして、はなればなれに ならない こと。みんな、もちばを まもる こと。

みんなが、一ぴきの 大きな 魚みたいに およげるようになった とき、スイミーは 言った。

「ぼくが、目に なるう。」

あさの つめたい 水の 中を、ひるの かがやく 光の 中を、みんなは およぎ、大きな 魚を おい出した。